

2013年3月20日

筒井哲郎

パンとサーカス

3月9日（土）の明治公園における反原発集会に、プラント技術者の会の仲間と共に夫婦で参加しました。

午後1時過ぎに地下鉄を降りると、ホームはずいぶん混んでいました。こんなに大勢の老若男女が反原発集会に集まっていくのか、と感心していたら、およそ9割の人々が、サッカー場へ入る長蛇の行列のうしろに並んでしまい、明治公園まで足を運ぶ人は、年配のいくぶんくたびれた人ばかりでした（わたしたちも含めて）。それでも1万5千人も集まったのだからたいしたものですが（注1）。

14時に、こちらのイベントの本番が始まると同時に、サッカー場の観客席から鐘や太鼓を打ち鳴らしての大声援が沸き起こり、われわれは身内の声が聞こえなくて、公園の前方に固まらざるを得ませんでした。

「ひそかに同胞の運命を憂慮する人々を、パンとサーカス（経済と娯楽）を求める人々の声が圧倒するのだ」というギリシア・ローマ以来の歴史の真実をまざまざと思い知らされました。

わが方の主催者の代表格は、なんといっても大江健三郎さんでした。けれども正直言って、大江さんのスピーチには途中からついていけませんでした。かれは、原稿から顔を上げることなく、終始紙を抱えて一本調子で読んでいました。しかも、ご自分の感想は僅かで、林京子さんという別の作家の文章を長々と引用していました。結局長いスピーチを聞いたけれども、彼が何を言いたかったのかに思い至ることが困難でした。これは炎天下に立っていて注意散漫になっていたわたしたちばかりではなく、『東京新聞』の記者も聴きそこねて、部分的に取り違えた記事を書き、後日訂正記事を載せていました（注2）。

スピーチした人々の中では、澤地久枝さん・落合恵子さん・福島県から避難した主婦の方などが、明快にご自分の考えを述べられ、「聞いて良かった」と思わせるものでした。

世の中の賢い人々の90%は敵方の陣営に巣食って、自分一己の安穩を貪っています。そして、圧倒的多数のひとびとはパンとサーカスに熱を上げています。そうではあっても、われわれは地道に真実を求めていかなければならないのでしょうか。

注1. 『東京新聞』2013年3月10日

注2. 『東京新聞』2013年3月12日